

## ササ地帯における造成後の草地

小 倉 紀 美

(天北農業試験場)

宗谷丘陵地区パイロット牧場の草地造成と維持管理の一部を携わってきた立場から、草地造成状況や牧草の定着状況、収量などについて、1,2考察してみたい。

本地区の造成法は、レーキドーザによる障害物除去とチョッパーによるササ処理の後、採草地と兼用地はブラッシュブレイカによる反転耕起法、放牧地はロータベータによるかく拌法が採用され、その後の施肥、播種、鎮圧は同様の方法により実施された。

酸性褐色森林土と疑似グライ土から成る当地域の土壤条件では、ササを土地に還元する造成法が望ましく、本方式の採用に先立って、ブッシュカッターとデスクによる不耕起造成法と慣行による耕起造成法を比較している(昭和57年)。この結果、不耕起造成法は、牧草の定着化や裸地の発生、雑草侵入の面で耕起法に劣り改善を要することがわかった。特に、ササの密度の濃い所では切断されたササがマット状となり、その部分の牧草の定着が著しく不良となり、雑草の侵入や裸地化を招いた。この原因は、干ばつのため水分不足による発芽不良もあるが、発芽後の水分供給が円滑に行かず枯死したものが多いためであった。このことから、干ばつに度々見舞われる当地域の気象条件を考慮するなら、播種床を堅密にし牧草のスタンド確立を図ることが重要であると判断され、前記のような工法を採用する大きな理由となった。

次に、草種の選定と草種の組合せにあたっては、地域性と利用方式を配慮し、放牧型1種類(オーチャードグラス・トールフェスク・ケンタッキーブルーグラス・シロクローバ)、兼用型1種類(オーチャードグラス・トールフェスク・シロク

ローバ)、採草型3種類(オーチャードグラス早生・シロクローバ、オーチャードグラス晩生・シロクローバ、チモシー・メドウフェスク・シロクローバ)の計5種類の草地を造成した。

造成草地の仕上り状態は全般に良好であり、反転耕起法による用地は良好に草地化されていた。一方、ロータベータによるかく拌法の放牧用地も雑草の侵入やササの再生も少なく、均平度も良好であった。このように、ササを破碎して、これを表土にかく拌混入させる地力温存型の本工法は造成段階において十分成功したと判断された。牧草の定着状況は、播種時期に降雨に恵まれ潤沢な土壤水分と適期内に播種されたことがあいまって整一に発芽し良好な定着を示した。発芽後、不順な天候のため、やや不振な生育経過をたどったが、越冬までに十分な生育期間があったので、全般に牧草の越冬態勢は十分であった。

造成2年目以降の維持管理は、北海道施肥標準(昭和53年)に準じて行った。牧草収量についてみると、2年目(昭和59年)は干ばつの気候で、宗谷管内の牧草収量は平年の86%程度であった。パイロット牧場では、採草地が $32 t/ha$ 、放牧地の牧養力が $328 CD$ (カウデー)であった。3年目(昭和60年)は全道的に干ばつの気候であったが、当地域では2番草の生育持期に比較的雨に恵まれた。このため、1番草の生育が不良であったにもかかわらず、年間の収量は採草地が約 $38 t/ha$ 、放牧地の牧養力は $350 CD$ を越えた。このように、放牧地の生産力は比較的良好であったが、採草地の収量は予期した程でなかった。この主な理由は1番草の生育時期の気候が低温寡照のため、1番草の収量が $19 t/ha$ 強程度しか得られなかつ

ためと判断される。

最後に、今後の草地の維持管理にあたっては、  
1 番草の増収を図るため春の施肥を出来るだけ早

めること、生産性の向上と維持年限の延長を図る  
ため糞尿の有効利用や秋施肥技術の活用、土壌診  
断技術の活用などが重要である。

・干ばつ対策

・粘質・強酸 → 維持管理の励行、10年に1回の更新  
(7~8年)

哺育・育成 → 肥育段階は農家で

法類:  $F_1$  の利用  $F_1$  の子 ( $F_2$ ) は ↑ すべて肉用に用いられる。